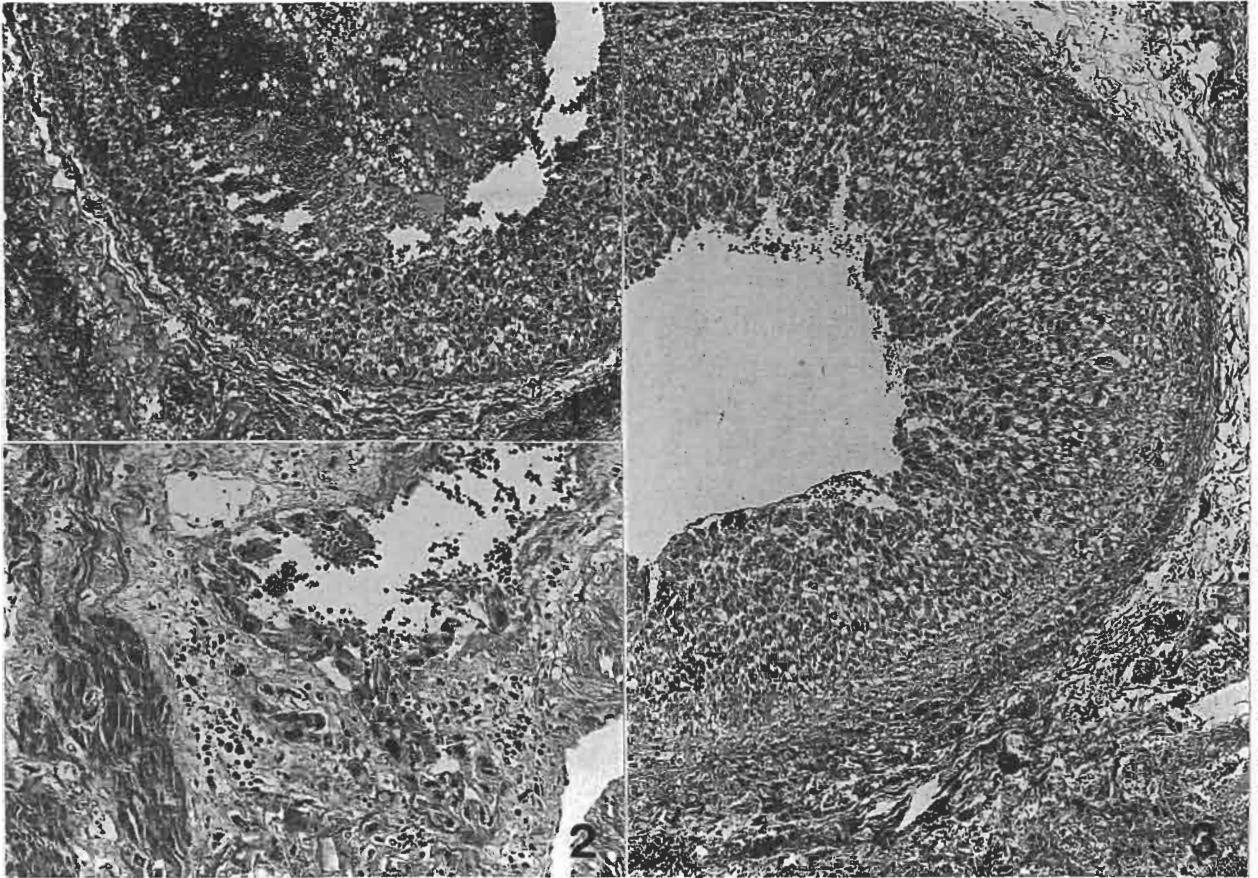


フタユビナマケモノの子宮

東京農工大学・草津熱帯園出題 第36回獣医病理学研修会標本No.670



動物：フタユビナマケモノ (Two-toed Sloth, *Cholepus didactylus*), 雌, 13歳以上。

臨床事項：3産目の1995年6月28日に正常の約半分の大きさの未熟子を死産した。その後、本例は食欲・元気がなくなり7月4日朝、死亡しているのが発見され、同日夕刻剖検された。

剖検所見：外陰部より出血、腹腔内には多量の血液が貯留。肺は退縮悪く、結節状あるいは帯状を呈する隆起が多数観察された。断面は出血を伴った壊死層が広がっていた。子宮の漿膜面は広範囲にわたり黄色に混濁、血液の付着もみられた。子宮内には多量の血餅と胎盤らしき組織を容れていた。変色部における子宮壁は肥厚、壊死に陥っていた。左側卵巣は右側に比べ大きく、断面は髓質部が血腫様であった。その他、脾臓漿膜面は斑状の肥厚部が一部で認められた。

組織所見：子宮壁は肥厚するが、内腔側の大部分は壊死に陥り、二次感染による好中球浸潤と細菌コロニーを含むその崩壊物よりなっていた。しかし、壊死層を含む子宮壁の血管には1-数個の核小体を容

れ、円形-長円形あるいは不正円形の大型核を持ち、比較的大きな細胞質を有する細胞が全周性に増殖していた。中には50ミクロンを越える大型核や数個の核を持つ合胞体細胞が観察された。これら細胞は子宮筋層間にも増殖し、一部は漿膜側にまで達する部位も存在した(写真1, 2)。一方、肺に観察された結節状あるいは帯状隆起部には写真3に示すような肺動脈壁の内膜より中膜に子宮で観察されたものと同一の大型細胞が増殖、あるいは肺実質内に弥漫性に大型細胞が観察、これらの増殖部位には出血あるいは壊死が広がっていた。同様の病巣は左側卵巣及び脾臓にも観察された。以上の所見は絨毛膜の栄養膜細胞および合胞体栄養膜細胞の特徴を有し、分娩(死産)後間もなく起こっていること、血管壁への浸潤や血管内への増殖が特徴であることから絨毛膜癌(choriocarcinoma)と診断した。

絨毛膜癌はヒト、アカゲザル及びアルマジロの血絨毛型胎盤を有する動物で知られているが、今回内皮絨毛型胎盤の動物で見いだされた。